

CHAPTER 10

それからの一週間、魔法薬学のクラスで、リバチウス・ボラージと違う指示があれば、ハリーは必ず「半純血のプリンス」の指示に従い続けた。

その結果、四度目のクラスでは、スラグホーンが、こんなに才能ある生徒はめったに教えたことはないと言った。ハリーを褒めそやした。

しかし、ロンもハーマイオニーも喜ばなかった。

ハリーは教科書を一緒に使おうと二人に申し出たが、ロンはハリー以上に手書き文字の判読に苦労したし、それに、怪しまれると困るので、そうそうハリーに読み上げてくれとも言えなかった。

一方ハーマイオニーは、頑として「公式」と指示なるものに従ってあくせく苦労していたが、プリンスの指示に劣る結果になるので、だんだん機嫌が悪くなっていた。

「半純血のプリンス」とは誰なのだろうと、ハリーは何となく考えることがあった。

宿題の量が量なので、「上級魔法薬」の本を全部読むことはできなかったが、ざっと目を通しただけでも、プリンスが書き込みをしていないページはほとんどなかった。

全部が全部、魔法薬のこととはかぎらず、プリンスが彼自身で創作したらしい呪文の使い方もあちこちに書いてあった。

「彼女自身かもね」ハーマイオニーがイライラしながら言った。

土曜日の夜、談話室でハリーが、その種の書き込みをロンに見せていたときのことだ。

「女性だったかもしれない。その筆跡は男子より女子のものみたいだと思うわ」

「『プリンス』って呼ばれてたんだ」ハリーが言った。

「女の子のプリンスなんて、何人いた？」ハーマイオニーは、この質問には答えられないようだった。

ただ顔をしかめ、ロンの手から自分の書いた「再物質化の原理」のレポートを引ったくった。

ロンはそれを、上下逆さまに読んでいた。

ハリーは腕時計を見て、急いで「上級魔法

Chapter 10

The House of Gaunt

For the rest of the week's Potions lessons Harry continued to follow the Half-Blood Prince's instructions wherever they deviated from Libatius Borage's, with the result that by their fourth lesson Slughorn was raving about Harry's abilities, saying that he had rarely taught anyone so talented. Neither Ron nor Hermione was delighted by this. Although Harry had offered to share his book with both of them, Ron had more difficulty deciphering the handwriting than Harry did, and could not keep asking Harry to read aloud or it might look suspicious. Hermione, meanwhile, was resolutely plowing on with what she called the "official" instructions, but becoming increasingly bad-tempered as they yielded poorer results than the Prince's.

Harry wondered vaguely who the Half-Blood Prince had been. Although the amount of homework they had been given prevented him from reading the whole of his copy of *Advanced Potion-Making*, he had skimmed through it sufficiently to see that there was barely a page on which the Prince had not made additional notes, not all of them concerned with potion-making. Here and there were directions for what looked like spells that the Prince had made up himself.

"Or herself," said Hermione irritably, overhearing Harry pointing some of these out to Ron in the common room on Saturday evening. "It might have been a girl. I think the handwriting looks more like a girl's than a boy's."

"The Half-Blood *Prince*, he was called," Harry said. "How many girls have been

葉」の古本をカバンにしまった。

「八時五分前だ。もう行かないと、ダンブルドアとの約束に遅れる」

「わぁーっ！」ハーマイオニーは、ハッとしたように顔を上げた。

「がんばって！私たち、待ってるわ。ダンブルドアが何を教えるのか、聞きたいもの！」

「うまくいくといいな」ロンが言った。

二人は、ハリーが肖像画の穴を抜けていくのを見送った。

ハリーは、誰もいない廊下を歩いた。

ところが、曲がり角からトレローニー先生が現れたので、急いで銅像の影に隠れなければならなかった。

先生は汚らしいトランプの束を切り、歩きながらそれを読んでブツブツ独り言を言っていた。

「スペードの2、対立」

ハリーがうずくまって隠れているそばを通りながら、先生が呟いた。

「スペードの7、凶。スペードの10、暴力。スペードのジャック、黒髪の若者。おそらく悩める若者で、この占い者を嫌っている……」

トレローニー先生は、ハリーの隠れている銅像の前でぴたりと足を止めた。

「まさか、そんなことはありえないですわ」イライラした口調だった。

また歩き出しながら、乱暴にトランプを切り直す音が耳に入り、立ち去ったあとには、安物のシェリー酒の匂いだけが微かに残っていた。

ハリーはトレローニーがたしかに行ってしまったとはっきりわかってから飛び出し、八階の廊下へと急いだ。

そこにはガーゴイルが一体、壁を背に立っていた。

「ペロペロ酸飴」

ハリーが唱えると、ガーゴイルが飛びのき、背後の壁が二つに割れた。

ハリーは、そこに現れた動く螺旋階段に乗り、滑らかな円を描きながら上に運ばれて、真鍮のドア・ノッカーがついたダンブルドアの校長室の扉の前に出た。

ハリーはドアをノックした。

Princes?”

Hermione seemed to have no answer to this. She merely scowled and twitched her essay on *The Principles of Rematerialization* away from Ron, who was trying to read it upside down.

Harry looked at his watch and hurriedly put the old copy of *Advanced Potion-Making* back into his bag.

“It’s five to eight, I’d better go, I’ll be late for Dumbledore.”

“Ooooh!” gasped Hermione, looking up at once. “Good luck! We’ll wait up, we want to hear what he teaches you!”

“Hope it goes okay,” said Ron, and the pair of them watched Harry leave through the portrait hole.

Harry proceeded through deserted corridors, though he had to step hastily behind a statue when Professor Trelawney appeared around a corner, muttering to herself as she shuffled a pack of dirty-looking playing cards, reading them as she walked.

“Two of spades: conflict,” she murmured, as she passed the place where Harry crouched, hidden. “Seven of spades: an ill omen. Ten of spades: violence. Knave of spades: a dark young man, possibly troubled, one who dislikes the questioner —”

She stopped dead, right on the other side of Harry’s statue.

“Well, that can’t be right,” she said, annoyed, and Harry heard her reshuffling vigorously as she set off again, leaving nothing but a whiff of cooking sherry behind her. Harry waited until he was quite sure she had gone, then hurried off again until he reached the spot in the seventh-floor corridor where a single gargoyle stood against the wall.

「お入り」ダンブルドアの声がした。
「先生、こんばんは」校長室に入りながら、ハリーが挨拶した。
「ああ、こんばんは、ハリー。お座り」ダンブルドアが微笑んだ。
「新学期の一週目は楽しかったかの？」
「はい、先生、ありがとうございます」ハリーが答えた。
「たいそう忙しかったようじゃのう。もう罰則を引っさげておる！」
「アー……」
ハリーはばつの悪い思いで言いかけたが、ダンブルドアは、あまり厳しい表情をしていなかった。
「スネイプ先生とは、代わりに次の土曜日にきみが罰則を受けるように決めてある」
「はい」
ハリーは、スネイプの罰則より差し迫ったことのほうが気になっていた。
何か、ダンブルドアが今夜計画していることを示すようなものはないかと、気づかれないうちにあたりを見回した。
円形の校長室はいつもと変わらないように見えた。
繊細な銀の道具類が、細い脚のテーブルの上で、ポツポツと煙を上げたり、くるくる渦巻いたりしている。
歴代校長の魔女や魔法使いの肖像画が、額の中で居眠りしている。
ダンブルドアの豪華な不死鳥、フォークスはドアの内側の止まり木から、キラキラと興味深げにハリーを見ていた。
ダンブルドアは、決闘訓練の準備に場所を広く空けることさえしていないようだった。
「では、ハリー」
ダンブルドアは事務的な声で言った。
「きみはきつと、わしがこの――ほかに適切な言葉がないのでそう呼ぶが――授業で、何を計画しておるか、と、いろいろ考えたじゃろうの？」
「はい、先生」
「さて、わしは、その時が来たと判断したのじゃ。ヴォルデモート卿が十五年前、何故きみを殺そうとしたかを、きみが知ってしまった以上、何らかの情報をきみに与えるときが

“Acid Pops,” said Harry, and the gargoyle leapt aside; the wall behind it slid apart, and a moving spiral stone staircase was revealed, onto which Harry stepped, so that he was carried in smooth circles up to the door with the brass knocker that led to Dumbledore’s office.

Harry knocked.

“Come in,” said Dumbledore’s voice.

“Good evening, sir,” said Harry, walking into the headmaster’s office.

“Ah, good evening, Harry. Sit down,” said Dumbledore, smiling. “I hope you’ve had an enjoyable first week back at school?”

“Yes, thanks, sir,” said Harry.

“You must have been busy, a detention under your belt already!”

“Er,” began Harry awkwardly, but Dumbledore did not look too stern.

“I have arranged with Professor Snape that you will do your detention next Saturday instead.”

“Right,” said Harry, who had more pressing matters on his mind than Snape’s detention, and now looked around surreptitiously for some indication of what Dumbledore was planning to do with him this evening. The circular office looked just as it always did; the delicate silver instruments stood on spindle-legged tables, puffing smoke and whirring; portraits of previous headmasters and headmistresses dozed in their frames, and Dumbledore’s magnificent phoenix, Fawkes, stood on his perch behind the door, watching Harry with bright interest. It did not even look as though Dumbledore had cleared a space for dueling practice.

“So, Harry,” said Dumbledore, in a

来たとな」
一瞬、間が空いた。
「先学年の終わりに、僕にすべてを話すって言ったのに」
ハリーは非難めいた口調を隠しきれなかった。
「そうおっしゃいました」ハリーは言い直した。
「そして、話したとも」ダンブルドアは穏やかに言った。
「わし知っていることはすべて話した。これから先は、事実という確固とした土地を離れ、我々はともに、記憶という濁った沼地を通り、推測というもつれた茂みへの当てどない旅に出るのじゃ。ここからは、ハリー、わしは、チーズ製の大鍋を作る時期が熟したと判断した、かのハンプリー・ベルチャーと同じぐらい、嘆かわしい間違いを犯しているかも知れぬ」
「でも、先生は自分が間違っていないとお考えなのですね？」
「当然じゃ。しかし、すでにきみに証したとおり、わしとてほかの者と同じように過ちを犯すことがある。事実、わしは大多数の者より——不遜な言い方じゃが——かなり賢いので、過ちもまた、より大きいものになりがちじゃ」
「先生」ハリーは遠慮がちに口を開いた。
「これからお話しくださるのは、予言と何か関係があるのですか？ その話は僕に役に立つのでしょうか……生き残るのに？」
「大いに予言に関係することじゃ」
ダンブルドアは、ハリーが明日の天気を質問したかのように、気軽に答えた。
「そして、きみが生き残るのに役立つものであることを、わしはもちろん望んでおる」
ダンブルドアは立ち上がって机を離れ、ハリーのそばを通り過ぎた。ハリーは座ったまま、逸る気持で、ダンブルドアが扉の脇のキャビネット棚に屈み込むのを見ていた。
身を起こしたとき、ダンブルドアの手には例の平たい石の水盆があった。
縁に不思議な彫り物が施してあるペンシーブ「憂いの篩」だ。
ダンブルドアはそれをハリーの目の前の机に

businesslike voice. “You have been wondering, I am sure, what I have planned for you during these — for want of a better word — lessons?”

“Yes, sir.”

“Well, I have decided that it is time, now that you know what prompted Lord Voldemort to try and kill you fifteen years ago, for you to be given certain information.”

There was a pause.

“You said, at the end of last term, you were going to tell me everything,” said Harry. It was hard to keep a note of accusation from his voice. “Sir,” he added.

“And so I did,” said Dumbledore placidly. “I told you everything I know. From this point forth, we shall be leaving the firm foundation of fact and journeying together through the murky marshes of memory into thickets of wildest guesswork. From here on in, Harry, I may be as woefully wrong as Humphrey Belcher, who believed the time was ripe for a cheese cauldron.”

“But you think you’re right?” said Harry.

“Naturally I do, but as I have already proven to you, I make mistakes like the next man. In fact, being — forgive me — rather cleverer than most men, my mistakes tend to be correspondingly huger.”

“Sir,” said Harry tentatively, “does what you’re going to tell me have anything to do with the prophecy? Will it help me ... survive?”

“It has a very great deal to do with the prophecy,” said Dumbledore, as casually as if Harry had asked him about the next day’s weather, “and I certainly hope that it will help you to survive.”

Dumbledore got to his feet and walked

置いた。

「心配そうじゃな」

たしかにハリーは、「憂いの師」を不安そうに見つめていた。

この奇妙な道具は、さまざまな想いや記憶を蓄え、現す。

この道具には、これまで教えられることも多かったが、同時に当惑させられる経験もした。

前回水盆の中身を掻き乱したとき、ハリーは見たくないものまでたくさん見てしまった。

しかしダンブルドアは微笑していた。

「こんどは、わしと一緒にこれに入る……さらに、いつもと違って、許可を得て入るのじゃ」

「先生、どこに行くのですか？」

「ボブ・オグデンの記憶の小道をたどる旅じゃ」

ダンブルドアは、ポケットからクリスタルの瓶を取り出した。

銀白色の物質が中で渦を巻いている。

「ボブ・オグデンて、誰ですか？」

「魔法法執行部に勤めていた者じゃ」ダンブルドアが答えた。

「先ごろ亡くなったが、その前にわしはオグデンを探し出し、記憶をわしに打ち明けるよう説得するだけの間があった。これから、オグデンが仕事上訪問した場所について行く。ハリー、さあ立ちなさい……」

しかしダンブルドアは、クリスタルの瓶の蓋を取るのに苦労していた。

怪我をした手が強張り、痛みがあるようだった。

「先生、やりましょうか——僕が？」

「ハリー、それには及ばぬ——」

ダンブルドアが杖で瓶を指すと、コルクが飛んだ。

「先生——どうして手を怪我なさったんですか？」

黒くなった指を、おどましくもあり、痛々しくも思いながら、ハリーはまた同じ質問をした。

「ハリーよ、いまはその話をするときではない。まだじゃ。ボブ・オグデンとの約束の時間があるのでな」

around the desk, past Harry, who turned eagerly in his seat to watch Dumbledore bending over the cabinet beside the door. When Dumbledore straightened up, he was holding a familiar shallow stone basin etched with odd markings around its rim. He placed the Pensieve on the desk in front of Harry.

“You look worried.”

Harry had indeed been eyeing the Pensieve with some apprehension. His previous experiences with the odd device that stored and revealed thoughts and memories, though highly instructive, had also been uncomfortable. The last time he had disturbed its contents, he had seen much more than he would have wished. But Dumbledore was smiling.

“This time, you enter the Pensieve with me ... and, even more unusually, with permission.”

“Where are we going, sir?”

“For a trip down Bob Ogden’s memory lane,” said Dumbledore, pulling from his pocket a crystal bottle containing a swirling silvery-white substance.

“Who was Bob Ogden?”

“He was employed by the Department of Magical Law Enforcement,” said Dumbledore. “He died some time ago, but not before I had tracked him down and persuaded him to confide these recollections to me. We are about to accompany him on a visit he made in the course of his duties. If you will stand, Harry ...”

But Dumbledore was having difficulty pulling out the stopper of the crystal bottle: His injured hand seemed stiff and painful.

“Shall — shall I, sir?”

ダンブルドアが銀色の中身を空けると、「憂いの篩」の中で、液体でも気体でもないものが微かに光りながら渦巻いた。

「先に行くがよい」ダンブルドアは、水盆へとハリーを促した。

ハリーは前屈みになり、息を深く吸って、銀色の物質の中に顔を突っ込んだ。

両足が校長室の床を離れるのを感じた。

渦巻く闇の中を、ハリーは下へ、下へと落ちていった。そして、突然の眩しい陽の光に、ハリーは目を瞬いた。目が慣れないうちに、ダンブルドアがハリーの傍らに降り立った。

二人は、田舎の小道に立っていた。

道の両側は絡み合った高い生垣に縁取られ、頭上には忘れな草のように鮮やかなブルーの夏空が広がっている。

二人の二、三メートル先に、背の低い小太りの男が立っていた。牛乳瓶の底のような分厚いメガネのせいで、その奥の目がモグラの目のように小さな点になって見える。

男は、道の左側のキイチゴの茂みから突き出している木の案内板を読んでいた。

これがオグデンに違いない。

ほかには人影がないし、それに、不慣れな魔法使いがマグルらしく見せるために選びがちな、ちぐはぐな服装をしている。

ワンピース型の縞の水着の上から燕尾服を羽織り、下にはスパッツを履いている。

しかし、ハリーが奇妙キテレツな服装を十分観察する間もなく、オグデンはきびきびと小道を歩き出した。

ダンブルドアとハリーはそのあとを追った。案内板を通り過ぎるときにハリーが見上げると、木片の一方はいま来た道を指して、「グレート・ハングルトン 8キロ」とあり、もう一方はオグデンの向かった方向を指して、「リトル・ハングルトン 6キロ」と標してある。

短い道程だったが、その間は、生垣と頭上に広がる青空、そして燕尾服の裾を左右に振りながら前を歩いていく姿しか見えなかった。

やがて小道が左に曲がり、急斜面の下り坂に

“No matter, Harry —”

Dumbledore pointed his wand at the bottle and the cork flew out.

“Sir — how did you injure your hand?” Harry asked again, looking at the blackened fingers with a mixture of revulsion and pity.

“Now is not the moment for that story, Harry. Not yet. We have an appointment with Bob Ogden.”

Dumbledore tipped the silvery contents of the bottle into the Pensieve, where they swirled and shimmered, neither liquid nor gas.

“After you,” said Dumbledore, gesturing toward the bowl.

Harry bent forward, took a deep breath, and plunged his face into the silvery substance. He felt his feet leave the office floor; he was falling, falling through whirling darkness and then, quite suddenly, he was blinking in dazzling sunlight. Before his eyes had adjusted, Dumbledore landed beside him.

They were standing in a country lane bordered by high, tangled hedgerows, beneath a summer sky as bright and blue as a forget-me-not. Some ten feet in front of them stood a short, plump man wearing enormously thick glasses that reduced his eyes to molelike specks. He was reading a wooden signpost that was sticking out of the brambles on the left-hand side of the road. Harry knew this must be Ogden; he was the only person in sight, and he was also wearing the strange assortment of clothes so often chosen by inexperienced wizards trying to look like Muggles: in this case, a frock coat and spats over a striped one-piece bathing costume. Before Harry had time to do more than register his bizarre appearance, however, Ogden had set off at a brisk walk down the lane.

なった。
突然目の前に、思いがけなく谷間全体の風景が広がった。
リトル・ハングルトンに違いないと思われる村が見えた。
二つの小高い丘の谷間に埋もれているその村の、教会も墓地も、ハリーにははっきり見えた。
谷を越えた反対側の丘の斜面に、ピロードのような広い芝生に囲まれた瀟洒な館が建っている。
オグデンは、急な下り坂でやむなく小走りになった。
ダンブルドアも歩幅を広げ、ハリーは急いでそれについて行った。
ハリーは、リトル・ハングルトンが最終目的地だろうと思った。
スラグホーンを見つけたあの夜もそうだったが、なぜ、こんな遠くから近づいていかなければならないのかが不思議だった。
しかし、すぐに、その村に行くと予想したハリーが間違いだったことに気づいた。
小道は右に折れ、二人がそこを曲がると、オグデンの燕尾服の端が生垣の隙間から消えようとしているところだった。
ダンブルドアとハリーは、オグデンを追って、舗装もされていない細道に入った。
その道も下り坂だったが、両側の生垣はこれまでより高くぼうぼうとして、道は曲がりくねり、岩だらけ、穴だらけだった。
細道は、少し下に見える暗い木々の塊まで続いているようだった。
思ったとおり、まもなく両側の生垣が切れ、細道は前方の木の茂みの中へと消えていった。
オグデンが立ち止まり、杖を取り出した。
ダンブルドアとハリーは、オグデンの背後で立ち止まった。
雲ひとつない空なのに、前方の古木の茂みが里仙々と深く涼しげな影を落としていたので、ハリーの目が、絡まりあった木々の間に半分隠れた建物を見分けるまでに数秒かった。
家を建てるにしても、とてもおかしい場所を選んだように思えた。

Dumbledore and Harry followed. As they passed the wooden sign, Harry looked up at its two arms. The one pointing back the way they had come read: GREAT HANGLETON, 5 MILES. The arm pointing after Ogden said LITTLE HANGLETON, 1 MILE.

They walked a short way with nothing to see but the hedgerows, the wide blue sky overhead and the swishing, frock-coated figure ahead. Then the lane curved to the left and fell away, sloping steeply down a hillside, so that they had a sudden, unexpected view of a whole valley laid out in front of them. Harry could see a village, undoubtedly Little Hangleton, nestled between two steep hills, its church and graveyard clearly visible. Across the valley, set on the opposite hillside, was a handsome manor house surrounded by a wide expanse of velvety green lawn.

Ogden had broken into a reluctant trot due to the steep downward slope. Dumbledore lengthened his stride, and Harry hurried to keep up. He thought Little Hangleton must be their final destination and wondered, as he had done on the night they had found Slughorn, why they had to approach it from such a distance. He soon discovered that he was mistaken in thinking that they were going to the village, however. The lane curved to the right and when they rounded the corner, it was to see the very edge of Ogden's frock coat vanishing through a gap in the hedge.

Dumbledore and Harry followed him onto a narrow dirt track bordered by higher and wilder hedgerows than those they had left behind. The path was crooked, rocky, and potholed, sloping downhill like the last one, and it seemed to be heading for a patch of dark trees a little below them. Sure enough, the track soon opened up at the copse, and Dumbledore and Harry came to a halt behind

家の周りの木々を伸び放題にして、光という光を遮るばかりか、下の谷間の景色までも遮っているのは不思議なやり方だと思った。人が住んでいるのかどうか、ハリーは訝った。

壁は苔むし、屋根瓦がごっそり剥がれ落ちて、垂木がところどころむき出しになっている。

イラクサがそこら中にはびこり、先端が窓まで達している。

窓は小さく、汚れがべっとりとこびりついている。

こんなところには誰も住めるはずがないとハリーがそう結論を出したとたん、窓の一つがガタガタと音を立てて開き、誰かが料理をしているかのように、湯気や煙が細々と流れ出してきた。

オグデンはそっと、そしてハリーにはそう見えただが、かなり慎重に前進した。

周りの木々が、オグデンの上を滑るように暗い影を落としたとき、オグデンは再び立ち止まって玄関の戸を見つめた。

誰の仕業か、そこには蛇の死骸が釘で打ちつけられていた。

そのとき、木の葉がこすれ合う音がして、パリッという鋭い音とともに、すぐそばの木からボロをまとった男が降ってきて、オグデンのまん前に立ちはだかった。

オグデンはすばやく飛びのいたが、あまり急に跳んだので、燕尾服の尻尾を踏んづけて転びかけた。

「おまえは歓迎されない」

目の前の男は、髪がぼうぼうで、何色なのかわからないほど泥にまみれている。

齒は何本か欠けている。

小さい目は暗く、それぞれ逆の方向を見ている。

おどけて見えそうな姿が、この男の場合には、見るからに恐ろしかった。

オグデンがさらに散歩下がってから話し出したのも、無理はないとハリーは思った。

「あ——おはよう。魔法省から来た者だが」

「おまえは歓迎されない」

「あ——すみません——よくわかりません

Ogden, who had stopped and drawn his wand.

Despite the cloudless sky, the old trees ahead cast deep, dark, cool shadows, and it was a few seconds before Harry's eyes discerned the building half-hidden amongst the tangle of trunks. It seemed to him a very strange location to choose for a house, or else an odd decision to leave the trees growing nearby, blocking all light and the view of the valley below. He wondered whether it was inhabited; its walls were mossy and so many tiles had fallen off the roof that the rafters were visible in places. Nettles grew all around it, their tips reaching the windows, which were tiny and thick with grime. Just as he had concluded that nobody could possibly live there, however, one of the windows was thrown open with a clatter, and a thin trickle of steam or smoke issued from it, as though somebody was cooking.

Ogden moved forward quietly and, it seemed to Harry, rather cautiously. As the dark shadows of the trees slid over him, he stopped again, staring at the front door, to which somebody had nailed a dead snake.

Then there was a rustle and a crack, and a man in rags dropped from the nearest tree, landing on his feet right in front of Ogden, who leapt backward so fast he stood on the tails of his frock coat and stumbled.

"You're not welcome."

The man standing before them had thick hair so matted with dirt it could have been any color. Several of his teeth were missing. His eyes were small and dark and stared in opposite directions. He might have looked comical, but he did not; the effect was frightening, and Harry could not blame Ogden for backing away several more paces before he spoke.

"Er — good morning. I'm from the Ministry

が」オグデンが落ち着かない様子で言った。
ハリーはオグデンが極端に鈍いと思った。
ハリーに言わせれば、この得体の知れない人物は、はっきり物を言っている。
片手で杖を振り回し、もう一方の手にかなり血に塗れた小刀を持っているとなればなおさらだ。

「きみにはきっとわかるのじゃろう、ハリー？」ダンブルドアが静かに言った。

「ええ、もちろんです」ハリーはきょんとした。

「オグデンはどうして——？」

しかし、戸に打ちつけられた蛇の死骸が目に入ったとき、ハッと気がついた。

「あの男が話しているのは蛇語？」

「そうじゃよ」ダンブルドアは微笑みながら頷いた。

ポロの男はいまや、小刀を片手に、もう一方に杖を持ってオグデンに迫っていた。

「まあ、まあ……」

オグデンが言いはじめたときはすでに遅かった。

バーンと大きな音がして、オグデンは鼻を押さえて地面に倒れた。

指の間から気持の悪いねっとりした黄色いものが噴き出している。

「モーフィン！」大きな声がした。

年老いた男が小屋から飛び出してきた。

勢いよく戸を閉めたので、蛇の死骸が情けない姿で揺れた。

この男は最初の男より小さく、体の釣り合いが奇妙だった。

広い肩幅、長すぎる腕、さらに褐色に光る目やチリチリ短い髪と皺くちの顔が、年老いた強健な猿のような風貌に見せていた。

その男は、地べたのオグデンの姿を小刀を手にしてクワックワッと高笑いしながら眺めている男の傍らで、立ち止まった。

「魔法省だと？」オグデンを見下ろして、年老いた男が言った。

「そのとおり！」

オグデンは顔を拭いながら怒ったように言った。

「それで、あなたは、察するにゴーストさんですね？」

of Magic ——”

“*You’re not welcome.*”

“Er — I’m sorry — I don’t understand you,” said Ogden nervously.

Harry thought Ogden was being extremely dim; the stranger was making himself very clear in Harry’s opinion, particularly as he was brandishing a wand in one hand and a short and rather bloody knife in the other.

“You understand him, I’m sure, Harry?” said Dumbledore quietly.

“Yes, of course,” said Harry, slightly nonplussed. “Why can’t Ogden — ?”

But as his eyes found the dead snake on the door again, he suddenly understood.

“He’s speaking Parseltongue?”

“Very good,” said Dumbledore, nodding and smiling.

The man in rags was now advancing on Ogden, knife in one hand, wand in the other.

“Now, look ——” Ogden began, but too late: There was a bang, and Ogden was on the ground, clutching his nose, while a nasty yellowish goo squirted from between his fingers.

“Morfin!” said a loud voice.

An elderly man had come hurrying out of the cottage, banging the door behind him so that the dead snake swung pathetically. This man was shorter than the first, and oddly proportioned; his shoulders were very broad and his arms overlong, which, with his bright brown eyes, short scrubby hair, and wrinkled face, gave him the look of a powerful, aged monkey. He came to a halt beside the man with the knife, who was now cackling with laughter at the sight of Ogden on the ground.

「そうだ」ゴーントが答えた。
「こいつに顔をやられたか？」
「ええ、そうです！」オグデンが噛みつくように言った。
「前触れなしに来るからだ。そうだろうが？」
ゴーントがけんかを吹っかけるように言った。
「ここは個人の家だ。ズカズカ入ってくれは、息子が自己防衛するのは当然だ」
「何に対する防衛だと言うんです？ え？」。無様な格好で立ち上がりながら、オグデンが言った。
「お節介、侵入者、マグル、穢れたやつら」オグデンは杖を自分の鼻に向けた。大量に流れ出ている黄色い膿のようなものが、即座に止まった。
ゴーントはほとんど唇を動かさずに、口の端でモーフィンに話しかけた。
「家の中に入れ。口答えするな」
こんどは注意して聞いていたので、ハリーは蛇語を聞き取った。
言葉の意味が理解できただけでなく、オグデンの耳に聞こえたであろうシューシューという気味の悪い音も聞き分けた。
モーフィンは口答えしかかったが、父親の脅すような目つきに出会っていると、思い直したように、奇妙に横揺れする歩き方でドシンドシと小屋の中に入っていった。
玄関の戸をバタンと閉めたので、蛇がまたしても哀れに揺れた。
「ゴーントさん、わたしはあなたの息子さんに会いにきたんです」
燕尾服の前にまだ残っていた膿を拭き取りながら、オグデンが言った。
「あれがモーフィンですね？」
「ふん、あれがモーフィンだ」
年老いた男が素っ気なく言った。
「おまえは純血か？」突然食ってかかるように、男が聞いた。
「どっちでもいいことです」オグデンが冷たく言った。
ハリーは、オグデンへの尊敬の気持が高まるのを感じた。
ゴーントのほうは明らかに違う気持になった

“Ministry, is it?” said the older man, looking down at Ogden.

“Correct!” said Ogden angrily, dabbing his face. “And you, I take it, are Mr. Gaunt?”

“S’right,” said Gaunt. “Got you in the face, did he?”

“Yes, he did!” snapped Ogden.

“Should’ve made your presence known, shouldn’t you?” said Gaunt aggressively. “This is private property. Can’t just walk in here and not expect my son to defend himself.”

“Defend himself against what, man?” said Ogden, clambering back to his feet.

“Busybodies. Intruders. Muggles and filth.”

Ogden pointed his wand at his own nose, which was still issuing large amounts of what looked like yellow pus, and the flow stopped at once. Mr. Gaunt spoke out of the corner of his mouth to Morfin.

“Get in the house. Don’t argue.”

This time, ready for it, Harry recognized Parseltongue; even while he could understand what was being said, he distinguished the weird hissing noise that was all Ogden could hear. Morfin seemed to be on the point of disagreeing, but when his father cast him a threatening look he changed his mind, lumbering away to the cottage with an odd rolling gait and slamming the front door behind him, so that the snake swung sadly again.

“It’s your son I’m here to see, Mr. Gaunt,” said Ogden, as he mopped the last of the pus from the front of his coat. “That was Morfin, wasn’t it?”

“Ar, that was Morfin,” said the old man indifferently. “Are you pure-blood?” he asked, suddenly aggressive.

らしい。
目を細めてオグデンの顔を見ながら、嫌味たっぷりの挑発口調で呟いた。
「そう言えば、おまえみたいな鼻を村でよく見かけたな」
「そうでしょうとも。息子さんが、連中にしたい放題をしていたのでしたら」オグデンが言った。
「よろしければ、この話は中で続けませんか？」
「中で？」
「そうです。ゴーストさん。もう申し上げましたが、わたしはモーフィンのことで伺ったのです。ふくろうをお送りー」
「俺にはふくろうなど役に立たん」ゴーストが言った。
「手紙は開けない」
「それでは、訪問の前触れなしだったなどと、文句は言えないですな」オグデンがピシヤリと言った。
「わたしが伺ったのは、今朝早朝、ここで魔法法の重大な違反が起こったためー」
「わかった、わかった、わかった」ゴーストが喚いた。
「さあ、家に入りやがれ。どうセクソの役にも立たんぞ！」
家には小さい部屋が三つあるようだった。台所と居間を兼ねた部屋が中心で、そこに入りするドアが二つある。
モーフィンは燻っている暖炉のそばの汚らしい肘掛椅子に座り、生きたクサリヘビを太い指に絡ませて、それに向かって蛇語で小さく口ずさんでいた。

シュー、シューとかわいい蛇よ
クーネ、クーネと床に這え
モーフィン様の機嫌取れ
戸口に釘づけされぬよう

開いた窓のそばの、部屋の隅のほうから、あたふたと動く音がして、ハリーはこの部屋にもう一人誰かがいることに気づいた。
若い女性だ。
身にまとったボロボロの灰色の服が、背後の汚らしい石壁の色とまったく同じ色だ。

“That’s neither here nor there,” said Ogden coldly, and Harry felt his respect for Ogden rise. Apparently Gaunt felt rather differently. He squinted into Ogden’s face and muttered, in what was clearly supposed to be an offensive tone, “Now I come to think about it, I’ve seen noses like yours down in the village.”

“I don’t doubt it, if your son’s been let loose on them,” said Ogden. “Perhaps we could continue this discussion inside?”

“Inside?”

“Yes, Mr. Gaunt. I’ve already told you. I’m here about Morfin. We sent an owl —”

“I’ve no use for owls,” said Gaunt. “I don’t open letters.”

“Then you can hardly complain that you get no warning of visitors,” said Ogden tartly. “I am here following a serious breach of Wizarding law, which occurred here in the early hours of this morning —”

“All right, all right, all right!” bellowed Gaunt. “Come in the bleeding house, then, and much good it’ll do you!”

The house seemed to contain three tiny rooms. Two doors led off the main room, which served as kitchen and living room combined. Morfin was sitting in a filthy armchair beside the smoking fire, twisting a live adder between his thick fingers and crooning softly at it in Parseltongue:

Hissy, hissy, little snakey,

Slither on the floor,

You be good to Morfin

Or he’ll nail you to the door.

There was a scuffling noise in the corner

煤で汚れたまっ黒な竈で湯気を上げている深鍋のそばに立ち、上の棚の汚らしい鍋釜をいじり回している。

艶のない髪はダラリと垂れ、器量よしとは言えず、蒼白かなりぼってりした顔立ちをしている。

兄と同じに、両眼が逆の方向を見ている。二人の男よりは小ざっぱりしていたが、ハリーは、こんなに打ちひしがれた顔は見たことがないと思った。

「娘だ。メローピー」

オグデンが物問いたげに女性を見ていたので、ゴーストがしぶしぶ言った。

「おはようございます」オグデンが挨拶した。

女性は答えず、おどおどした眼差しで父親をちらりと見るなり部屋に背を向け、棚の鍋釜をあちこちに動かし続けた。

「さて、ゴーストさん」オグデンが話しはじめた。

「単刀直入に申し上げますが、息子さんのモーフィンが、昨夜半すぎ、マグルの面前で魔法をかけたと信じるに足る根拠があります」ガシャーンと耳を聳する音がした。メローピーが深鍋を一つ落としたのだ。

「拾え！」ゴーストが怒鳴った。

「そうだと。汚らわしいマグルのように、そうやって床に這いつくばって拾うがいい。何のための杖だ？ 役立たずのクソツタレ！」

「ゴーストさん、そんな！」

オグデンはショックを受けたように声を上げた。

メローピーはもう鍋を拾い上げていたが、顔をまだらに赤らめ、鍋をつかみ損ねてまた取り落とし、震えながらポケットから杖を取り出した。

杖を鍋に向け、慌ただしく何か聞き取れない呪文をブツブツ唱えたが、鍋は床から反対方向に吹き飛んで、向かい側の壁にぶつかってまっ二つに割れた。

モーフィンは狂ったように高笑いし、ゴーストは絶叫した。

「直せ、このウスノロのでくのほう、直せ！」

メローピーはよろめきながら鍋のほうに歩い

beside the open window, and Harry realized that there was somebody else in the room, a girl whose ragged gray dress was the exact color of the dirty stone wall behind her. She was standing beside a steaming pot on a grimy black stove, and was fiddling around with the shelf of squalid-looking pots and pans above it. Her hair was lank and dull and she had a plain, pale, rather heavy face. Her eyes, like her brother's, stared in opposite directions. She looked a little cleaner than the two men, but Harry thought he had never seen a more defeated-looking person.

“M'daughter, Merope,” said Gaunt grudgingly, as Ogden looked inquiringly toward her.

“Good morning,” said Ogden.

She did not answer, but with a frightened glance at her father turned her back on the room and continued shifting the pots on the shelf behind her.

“Well, Mr. Gaunt,” said Ogden, “to get straight to the point, we have reason to believe that your son, Morfin, performed magic in front of a Muggle late last night.”

There was a deafening clang. Merope had dropped one of the pots.

“*Pick it up!*” Gaunt bellowed at her. “That’s it, grub on the floor like some filthy Muggle, what’s your wand for, you useless sack of muck?”

“Mr. Gaunt, please!” said Ogden in a shocked voice, as Merope, who had already picked up the pot, flushed blotchily scarlet, lost her grip on the pot again, drew her wand shakily from her pocket, pointed it at the pot, and muttered a hasty, inaudible spell that caused the pot to shoot across the floor away from her, hit the opposite wall, and crack in

ていったが、杖を上げる前に、オグデンが杖を上げて、「レバロ！＜直れ＞」としっかり唱えた。

鍋はたちまち元通りになった。

ゴーストは、一瞬オグデンを怒鳴りつけそうに見えたが、思い直したように、代わりに娘を嘲った。

「魔法省からのすてきなの方がいて、幸運だったな？もしかするとこのの方が俺の手からおまえを取り上げてくださるかもしれんぞ。もしかするとこのの方は、汚らしいスクイブでも気になさらないかもしれん……」

誰の顔も見ず、オグデンに礼も言わず、メローピーは拾い上げた鍋を、震える手で元の棚に戻した。

それから、汚らしい窓と竈の間の壁に背中をつけて、できることなら石壁の中に沈み込んで消えてしまいたいというように、じっと動かずに立ち尽くしていた。

「ゴーストさん」オグデンはあらためて話しはじめた。

「すでに申しあげましたように、わたしが参りましたのはー」

「一回聞けばたくさんだ！」ゴーストがピシヤリと言った。

「それがどうした？モーフィンは、マグルにふさわしいものをくれてやっただけだーそれがどうだって言うんだ？」

「モーフィンは、魔法法を破ったのです」オグデンは厳しく言った。

「モーフィンが魔法法を破ったのです」ゴーストがオグデンの声をまね、大げさに節をつけて言った。

モーフィンがまた高笑いした。

「息子は、汚らわしいマグルに焼きを入れてやったまでだ。それが違法だと？」

「そうです」オグデンが言った。

「残念ながら、そうです」

オグデンは、内ポケットから小さな羊皮紙の巻紙を取り出し、広げた。

「こんどは何だ？息子の判決か？」ゴーストは怒ったように声を荒らげた。

「これは魔法省への召喚状で、尋問は……」

「召喚状！召喚状？何様だと思ってるんだ？俺の息子をどっかに呼びつけるとは！」

two.

Morfin let out a mad cackle of laughter. Gaunt screamed, “Mend it, you pointless lump, mend it!”

Merope stumbled across the room, but before she had time to raise her wand, Ogden had lifted his own and said firmly, “*Reparo.*” The pot mended itself instantly.

Gaunt looked for a moment as though he was going to shout at Ogden, but seemed to think better of it: Instead, he jeered at his daughter, “Lucky the nice man from the Ministry’s here, isn’t it? Perhaps he’ll take you off my hands, perhaps he doesn’t mind dirty Squibs. ...”

Without looking at anybody or thanking Ogden, Merope picked up the pot and returned it, hands trembling, to its shelf. She then stood quite still, her back against the wall between the filthy window and the stove, as though she wished for nothing more than to sink into the stone and vanish.

“Mr. Gaunt,” Ogden began again, “as I’ve said: the reason for my visit —”

“I heard you the first time!” snapped Gaunt. “And so what? Morfin gave a Muggle a bit of what was coming to him — what about it, then?”

“Morfin has broken Wizarding law,” said Ogden sternly.

“ ‘Morfin has broken Wizarding law.’ ” Gaunt imitated Ogden’s voice, making it pompous and singsong. Morfin cackled again. “He taught a filthy Muggle a lesson, that’s illegal now, is it?”

“Yes,” said Ogden. “I’m afraid it is.”

He pulled from an inside pocket a small scroll of parchment and unrolled it.

「わたしは、魔法警察部隊の部隊長です」オグデンが言った。

「それで、俺たちのことはクズだと思っているんだろう。え？」

ゴーストはいまやオグデンに詰め寄り、黄色い爪でオグデンの胸を指しながら喚き立てた。

「魔法省が来いと言えばすっ飛んでいくクズだとでも？ いったい誰に向かって物を言うのか、わかっているのか？ この小汚ねえ、ちんちくりんの穢れた血め！」

「ゴーストさんに向かって話しているつもりでおりましたが」オグデンは、用心しながらもたじろがなかった。

「そのとおりだ！」ゴーストが吠えた。一瞬、ハリーは、ゴーストが指を突き立てて卑猥な手つきをするのかと思った。

しかしそうではなく、中指にはめている黒い石つきの醜悪な指輪を、オグデンの目の前で振って見せただけだった。

「これが見えるか？ 見えるか？ 何だか知っているか？ これがどこから来たものか知っているか？ 何世紀も俺の家族の物だった。それほど昔に遡る家系だ。しかもずっと純血だ！ どれだけの値段をつけられたことがあるかわかるか？ 石にペベレル家の紋章が刻まれた、この指輪に！」

「まったくわかりませんな」

オグデンは、鼻先にずいと指輪を突きつけられて目を瞬かせた。

「それに、ゴーストさん、それはこの話には関係がない。あなたの息子さんは、違法な——」

怒りに吠え猛り、ゴーストは娘に飛びついた。

ゴーストの手がメローピーの首にかかったので、ほんの一瞬ハリーは、ゴーストが娘の首を絞めるのかと思った。

次の瞬間、ゴーストは娘の首にかかっていた金鎖をつかんで、メローピーをオグデンのほうに引きずってきた。

「これが見えるか？」

オグデンに向かって重そうな金のロケットを振り、メローピーが息を詰まらせて咳き込む中、ゴーストが大声を上げた。

“What’s that, then, his sentence?” said Gaunt, his voice rising angrily.

“It is a summons to the Ministry for a hearing —”

“Summons! *Summons*? Who do you think you are, summoning my son anywhere?”

“I’m Head of the Magical Law Enforcement Squad,” said Ogden.

“And you think we’re scum, do you?” screamed Gaunt, advancing on Ogden now, with a dirty yellow-nailed finger pointing at his chest. “Scum who’ll come running when the Ministry tells ’em to? Do you know who you’re talking to, you filthy little Mudblood, do you?”

“I was under the impression that I was speaking to Mr. Gaunt,” said Ogden, looking wary, but standing his ground.

“That’s right!” roared Gaunt. For a moment, Harry thought Gaunt was making an obscene hand gesture, but then realized that he was showing Ogden the ugly, black-stoned ring he was wearing on his middle finger, waving it before Ogden’s eyes. “See this? See this? Know what it is? Know where it came from? Centuries it’s been in our family, that’s how far back we go, and pure-blood all the way! Know how much I’ve been offered for this, with the Peverell coat of arms engraved on the stone?”

“I’ve really no idea,” said Ogden, blinking as the ring sailed within an inch of his nose, “and it’s quite beside the point, Mr. Gaunt. Your son has committed —”

With a howl of rage, Gaunt ran toward his daughter. For a split second, Harry thought he was going to throttle her as his hand flew to her throat; next moment, he was dragging her toward Ogden by a gold chain around her neck.

“See this?” he bellowed at Ogden, shaking a

「見えます。見えますとも！」オグデンが慌てて言った。

「スリザリンのだ！」ゴーストが喚いた。
「サラザール・スリザリンだ！我々はスリザリンの最後の末裔だ。何とか言ってみろ、え？」

「ゴーストさん、娘さんが！」
オグデンが危険を感じて口走ったが、ゴーストはすでにメローピーを放していた。
メローピーは、よろよろとゴーストから離れて部屋の隅に戻り、喘ぎながら首をさすった。

「どうだ！」もつれた争点もこれで問答無用とばかり、ゴーストは勝ち誇って言った。
「我々に向かって、きさまの靴の泥に物を言うような口のきき方をするな！何世紀にもわたって純血だ。全員魔法使いだ——きさまなんかよりずっと純血だってことは、間違いないんだ！」

そしてゴーストはオグデンの足下に唾を吐いた。

モーフィンがまた高笑いした。
メローピーは窓の脇にうずくまって首を垂れ、ダランとした髪で顔を隠して何も言わなかった。

「ゴーストさん」オグデンは粘り強く言った。

「残念ながら、あなたの先祖も私の先祖も、この件には何の関わりもありません。わたしはモーフィンのことでここにいるのです。それに昨夜、夜半すぎにモーフィンが声をかけたマグルのことです。我々の情報によれば」オグデンは羊皮紙に目を走らせた。

「モーフィンは、当該マグルに対し呪いもしくは呪詛をかけ、この男に非常な痛みを伴う麻疹を発疹させしめた」

モーフィンがヒヤッヒヤッと笑った。

「黙っとれ」ゴーストが蛇語で唸った。モーフィンはまた静かになった。

「それで、息子がそうしたとしたら、どうだと？」

ゴーストが、オグデンに挑むように言った。

「おまえたちがそのマグルの小汚い顔を、きれいに拭き取ってやったのだろうか。ついでに記憶までな……」

heavy gold locket at him, while Merope spluttered and gasped for breath.

“I see it, I see it!” said Ogden hastily.

“*Slytherin’s!*” yelled Gaunt. “Salazar Slytherin’s! We’re his last living descendants, what do you say to that, eh?”

“Mr. Gaunt, your daughter!” said Ogden in alarm, but Gaunt had already released Merope; she staggered away from him, back to her corner, massaging her neck and gulping for air.

“So!” said Gaunt triumphantly, as though he had just proved a complicated point beyond all possible dispute. “Don’t you go talking to us as if we’re dirt on your shoes! Generations of purebloods, wizards all — more than *you* can say, I don’t doubt!”

And he spat on the floor at Ogden’s feet. Morfin cackled again. Merope, huddled beside the window, her head bowed and her face hidden by her lank hair, said nothing.

“Mr. Gaunt,” said Ogden doggedly, “I am afraid that neither your ancestors nor mine have anything to do with the matter in hand. I am here because of Morfin, Morfin and the Muggle he accosted late last night. Our information” — he glanced down at his scroll of parchment — “is that Morfin performed a jinx or hex on the said Muggle, causing him to erupt in highly painful hives.”

Morfin giggled.

“*Be quiet, boy,*” snarled Gaunt in Parseltongue, and Morfin fell silent again.

“And so what if he did, then?” Gaunt said defiantly to Ogden. “I expect you’ve wiped the Muggle’s filthy face clean for him, and his memory to boot —”

“That’s hardly the point, is it, Mr. Gaunt?” said Ogden. “This was an unprovoked attack

「ゴーストさん、要はそういう話ではないでしょう？」オグデンが言った。

「この件は、何もしないのに丸腰の者に攻撃を——」

「ふん、最初におまえを見たときからマグル好きなやつだと睨んでいたわ」ゴーストはせせら笑ってまた床に唾を吐いた。

「話し合っても将が明きませんな」オグデンはきっぱりと言った。

「息子さんの態度からして、自分の行為を何ら後悔していないことは明らかです」

オグデンは、もう一度羊皮紙の巻紙に目を通した。

「モーフィンは九月十四日、口頭尋問に出頭し、マグルの面前で魔法を使ったこと、さらに当該マグルを傷害し、精神的苦痛を与えたことにつき尋問を受——」

オグデンは急に言葉を切った。

蹄の音、鈴の音、そして声高に笑う声が、開け放した窓から流れ込んできた。

村に続く曲がりくねった小道が、どうやらこの家の木立のすぐそばを通っているらしい。ゴーストはその場に凍りついたように、目を見開いて音を聞いていた。

モーフィンはシュッシュッと舌を鳴らしながら、意地汚い表情で、音のするほうに顔を向けた。

メローピーも顔を上げた。

ハリーの目に、まっ青なメローピーの顔が見えた。

「おやまあ、何て目障りなんでしょう！」

若い女性の声が、まるで同じ部屋の中で、すぐそばに立ってしゃべっているかのようにはっきりと、開けた窓から響いてきた。

「ねえ、トム、あなたのお父さま、あんな掘っ建て小屋、片付けてくださらないかしら？」

「僕たちのじゃないんだよ」若い男の言った。

「谷の反対側は全部僕たちの物だけど、この小屋は、ゴーストという碌でなしのじいさんと子どもたちの物なんだ。息子は相当おかしくてね、村でどんな噂があるか聞いてごらんよ——」

若い女性が笑った。

on a defenseless ——”

“Ar, I had you marked out as a Muggle-lover the moment I saw you,” sneered Gaunt, and he spat on the floor again.

“This discussion is getting us nowhere,” said Ogden firmly. “It is clear from your son’s attitude that he feels no remorse for his actions.” He glanced down at his scroll of parchment again. “Morfin will attend a hearing on the fourteenth of September to answer the charges of using magic in front of a Muggle and causing harm and distress to that same Mugg ——”

Ogden broke off. The jingling, clapping sounds of horses and loud, laughing voices were drifting in through the open window. Apparently the winding lane to the village passed very close to the copse where the house stood. Gaunt froze, listening, his eyes wide. Morfin hissed and turned his face toward the sounds, his expression hungry. Merope raised her head. Her face, Harry saw, was starkly white.

“My God, what an eyesore!” rang out a girl’s voice, as clearly audible through the open window as if she had stood in the room beside them. “Couldn’t your father have that hovel cleared away, Tom?”

“It’s not ours,” said a young man’s voice. “Everything on the other side of the valley belongs to us, but that cottage belongs to an old tramp called Gaunt, and his children. The son’s quite mad, you should hear some of the stories they tell in the village ——”

The girl laughed. The jingling, clapping noises were growing louder and louder. Morfin made to get out of his armchair.

“Keep your seat,” said his father warningly, in Parseltongue.

パカパカという蹄の昔、シャンシャンという鈴の音がだんだん大きくなった。モーフィンが肘掛椅子から立ち上がりかけた。

「座ってろ」父親が蛇語で、警告するように言った。

「ねえ、トム」また若い女性の声だ。これだけ間近に聞こえるのは、二人が家のすぐ脇を通っているに違いない。

「あたくしの勘違いかもしれないけどーあのドアに蛇が釘づけになっていない？」

「何てことだ！君の言うとおりで！」男の声があった。

「息子の仕業だな。頭がおかしいって、言っただろう？ セシリア、ねえダーリン、見ちゃダメだよ」

蹄の音も鈴の音も、こんどはだんだん弱くなってきた。

「ダーリン」モーフィンが妹を見ながら蛇語で囁いた。

「『ダーリン』、あいつはそう呼んだ。だからあいつは、どうせ、おまえをもらっちゃくれない」

メロービーがあまりにまっ青なので、ハリーはきっと気絶すると思った。

「何のことだ？」

ゴーストは息子と娘を交互に見ながら、やはり蛇語で、鋭い口調で聞いた。

「何て言った？ モーフィン？」

「こいつはあのマグルを見るのが好きだ」いまや怯えきっている妹を、残酷な表情で見つめながら、モーフィンが言った。

「あいつが通るときは、いつも庭にいて、生垣の間から覗いている。そうだろう？ それに昨日の夜はー」

メロービーはさすがのように、頭を強く横に振った。

しかしモーフィンは情け容赦なく続けた。

「窓から身を乗り出して、あいつが馬で家に帰るのを待っていた。そうだろう？」

「マグルを見るのに、窓から身を乗り出していただと？」ゴーストが低い声で言った。

ゴースト家の三人は、オグデンのことを忘れたかのようだった。

オグデンは、またしても起こったシューシュ

“Tom,” said the girl’s voice again, now so close they were clearly right beside the house, “I might be wrong — but has somebody nailed a snake to that door?”

“Good lord, you’re right!” said the man’s voice. “That’ll be the son, I told you he’s not right in the head. Don’t look at it, Cecilia, darling.”

The jingling and clopping sounds were now growing fainter again.

“ ‘Darling,’ ” whispered Morfin in Parseltongue, looking at his sister. “ ‘Darling,’ he called her. So he wouldn’t have you anyway.”

Merope was so white Harry felt sure she was going to faint.

“What’s that?” said Gaunt sharply, also in Parseltongue, looking from his son to his daughter. “What did you say, Morfin?”

“She likes looking at that Muggle,” said Morfin, a vicious expression on his face as he stared at his sister, who now looked terrified. “Always in the garden when he passes, peering through the hedge at him, isn’t she? And last night —”

Merope shook her head jerkily, imploringly, but Morfin went on ruthlessly, “Hanging out of the window waiting for him to ride home, wasn’t she?”

“Hanging out of the window to look at a Muggle?” said Gaunt quietly.

All three of the Gaunts seemed to have forgotten Ogden, who was looking both bewildered and irritated at this renewed outbreak of incomprehensible hissing and rasping.

“Is it true?” said Gaunt in a deadly voice, advancing a step or two toward the terrified

一、ガラガラという音のやり取りを前に、わけがわからず当惑してイライラしていた。

「本当か？」

ゴーナーは恐ろしい声でそう言うと、怯えている娘に一、二歩詰め寄った。

「俺の娘が――サラザール・スリザリンの純血の末裔が――穢れた泥の血のマグルに焦がれているのか？」

メローピーは壁に体を押しつけ、激しく首を振った。口もきけない様子だ。

「だけど、父さん、俺がやっつけた！」モーフィンが高笑いした。

「あいつが傍を通った時、おれがやった。蕁麻疹だらけじゃ、色男も形無しだった。メローピーそうだろう？」

「この嫌らしいスクイブめ！血を裏切る汚らわしいやつめ！」

ゴーストが吠え猛り、抑制がきかなくなって娘の首を両手で絞めた。

「やめろ！」

ハリーとオグデンが同時に叫んだ。

オグデンは杖を上げ、「レラシオ！＜放せ＞」と叫んだ。

ゴーストはのけ反るように吹っ飛ばされて娘から離れ、椅子にぶつかって仰向けに倒れた。

怒り狂ったモーフィンが、喚きながら椅子から飛び出し、血なまぐさいナイフを振り回し、杖からめちゃくちゃに呪いを発射しながら、オグデンに襲いかかった。

オグデンは命からがら逃げ出した。

ダンブルドアが、跡を追わなければならないと告げ、ハリーはそれに従った。

メローピーの悲鳴がハリーの耳にこだましていた。

オグデンは両腕で頭を抱え、矢のように路地を抜けて元の小道に飛び出した。

そこでオグデンは艶やかな栗毛の馬に衝突した。

馬にはとてもハンサムな男髪の青年が乗っていた。

青年も、その隣で葦毛の馬に乗っていたきれいな若い女性も、オグデンの姿を見て大笑いした。

オグデンは馬の脇腹にぶつかって掛ね飛ばさ

girl. “My daughter — pure-blooded descendant of Salazar Slytherin — hankering after a filthy, dirt-veined Muggle?”

Merope shook her head frantically, pressing herself into the wall, apparently unable to speak.

“But I got him, Father!” cackled Morfin. “I got him as he went by and he didn’t look so pretty with hives all over him, did he, Merope?”

“You disgusting little Squib, you filthy little blood traitor!” roared Gaunt, losing control, and his hands closed around his daughter’s throat.

Both Harry and Ogden yelled “No!” at the same time; Ogden raised his wand and cried, “Relashio!” Gaunt was thrown backward, away from his daughter; he tripped over a chair and fell flat on his back. With a roar of rage, Morfin leapt out of his chair and ran at Ogden, brandishing his bloody knife and firing hexes indiscriminately from his wand.

Ogden ran for his life. Dumbledore indicated that they ought to follow and Harry obeyed, Merope’s screams echoing in his ears.

Ogden hurtled up the path and erupted onto the main lane, his arms over his head, where he collided with the glossy chestnut horse ridden by a very handsome, dark-haired young man. Both he and the pretty girl riding beside him on a gray horse roared with laughter at the sight of Ogden, who bounced off the horse’s flank and set off again, his frock coat flying, covered from head to foot in dust, running pell-mell up the lane.

“I think that will do, Harry,” said Dumbledore. He took Harry by the elbow and tugged. Next moment, they were both soaring weightlessly through darkness, until they

れたが立ち直り、燕尾服の裾をはためかせ、頭のとっぺんから爪先まで埃だらけになりながら、ほうほうの体で小道を走っていった。

「ハリー、もうよいじゃろう」

ダンブルドアはハリーの肘をつかんで、ぐいと引いた。

次の瞬間、二人は無重力の暗闇の中を舞い上がり、やがて、薄暗くなったダンブルドアの部屋にしっかりと降り立った。

「あの小屋の娘はどうなったんですか？」

ダンブルドアが杖を一振りして、さらにいくつかのランプに灯を点したとき、ハリーはまっ先に聞いた。

「メローピーとか、そんな名前でしたけど？」

「おう、あの娘は生き延びた」

ダンブルドアは机に戻り、ハリーにも座るように促した。

「オグデンは『姿現わし』で魔法省に戻り、十五分後には援軍を連れて再びやって来た。モーフィンと父親は抵抗したが、二人とも取り押さえられてあの小屋から連れ出され、その後ウィゼンガモット法廷で有罪の判決を受けた。モーフィンはすでにマグル襲撃の前科を持っていたため、三年間のアズカバン送りの判決を受けた。マールヴォロはオグデンのほか数人の魔法省の役人を傷つけたため、六ヶ月の収監になったのじゃ」

「マールヴォロ？」ハリーは怪訝そうに聞き返した。

「そうじゃ」ダンブルドアは満足げに微笑んだ。

「きみが、ちゃんと話について来てくれるのはうれしい」

「あの年寄りがー？」

「ヴォルデモートの祖父。そうじゃ」ダンブルドアが言った。

「マールヴォロ、息子のモーフィンそして娘のメローピーは、ゴースト家の最後の三人じゃ。非常に古くから続く魔法界の家柄じゃが、いとも同士が結婚をする習慣から、何世紀にもわたって情緒不安定と暴力の血筋で知られていた。常識の欠如に壮大なことを好む傾向が加わり、マールヴォロが生まれる数世代前には、先祖の財産をすでに浪費し尽くし

landed squarely on their feet, back in Dumbledore's now twilit office.

“What happened to the girl in the cottage?” said Harry at once, as Dumbledore lit extra lamps with a flick of his wand. “Merope, or whatever her name was?”

“Oh, she survived,” said Dumbledore, reseating himself behind his desk and indicating that Harry should sit down too. “Ogden Apparated back to the Ministry and returned with reinforcements within fifteen minutes. Morfin and his father attempted to fight, but both were overpowered, removed from the cottage, and subsequently convicted by the Wizengamot. Morfin, who already had a record of Muggle attacks, was sentenced to three years in Azkaban. Marvolo, who had injured several Ministry employees in addition to Ogden, received six months.”

“Marvolo?” Harry repeated wonderingly.

“That's right,” said Dumbledore, smiling in approval. “I am glad to see you're keeping up.”

“That old man was — ?”

“Voldemort's grandfather, yes,” said Dumbledore. “Marvolo, his son, Morfin, and his daughter, Merope, were the last of the Gaunts, a very ancient Wizarding family noted for a vein of instability and violence that flourished through the generations due to their habit of marrying their own cousins. Lack of sense coupled with a great liking for grandeur meant that the family gold was squandered several generations before Marvolo was born. He, as you saw, was left in squalor and poverty, with a very nasty temper, a fantastic amount of arrogance and pride, and a couple of family heirlooms that he treasured just as much as his son, and rather more than his daughter.”

“So Merope,” said Harry, leaning forward

ていた。きみも見たように、マールヴォロは惨めさと貧困の中に暮らし、非常に怒りっぽい上、異常な傲慢さと誇りを持ち、また先祖代々の家宝を二つ、息子と同じぐらい、そして娘よりはずっと大切に持っていたのじゃ」

「それじゃ、メローピーは」ハリーは座ったまま身を乗り出し、ダンブルドアを見つめた。

「メローピーは……先生、ということは、あの人は……ヴォルデモートの母親？」

「そういうことじゃ」ダンブルドアが言った。

「それに、偶然にも我々は、ヴォルデモートの父親の姿も垣間見た。果たして気がついたかの？」

「モーフィンが襲ったマグルですか？ あの馬に乗っていた？」

「よくできた」ダンブルドアがニッコリした。

「そうじゃ。ゴーンの小屋を、よく馬で通り過ぎていたハンサムなマグル、あれがトム・リドル・シニアじゃ。メローピー・ゴーンが密かに胸を焦がしていた相手じゃよ」

「それで、二人は結婚したんですか？」

ハリーは信じられない思いで言った。

あれほど恋に落ちそうにもない組み合わせは、他に想像もつかなかった。

「忘れているようじゃの」ダンブルドアが言った。

「メローピーは魔女じゃ。父親に怯えているときには、その魔力が十分生かされていたとは思えぬ。マールヴォロとモーフィンがアзкаバンに入って安心し、生まれて初めて一人になり自由になったとき、メローピーはきっと自分の能力を完全に解放し、十八年間の絶望的な生活から逃れる手はずを整えることができたのじゃ」

「トム・リドルにマグルの女性を忘れさせ、代わりに自分と恋に陥るようにするため、メローピーがどんな手段を講じたか、考えられるかの？」

「『服従の呪文』？」ハリーが意見を述べた。

「それとも『愛の妙薬』？」

in his chair and staring at Dumbledore, “so Merope was ... Sir, does that mean she was ... *Voldemort's mother?*”

“It does,” said Dumbledore. “And it so happens that we also had a glimpse of Voldemort’s father. I wonder whether you noticed?”

“The Muggle Morfin attacked? The man on the horse?”

“Very good indeed,” said Dumbledore, beaming. “Yes, that was Tom Riddle senior, the handsome Muggle who used to go riding past the Gaunt cottage and for whom Merope Gaunt cherished a secret, burning passion.”

“And they ended up married?” Harry said in disbelief, unable to imagine two people less likely to fall in love.

“I think you are forgetting,” said Dumbledore, “that Merope was a witch. I do not believe that her magical powers appeared to their best advantage when she was being terrorized by her father. Once Marvolo and Morfin were safely in Azkaban, once she was alone and free for the first time in her life, then, I am sure, she was able to give full rein to her abilities and to plot her escape from the desperate life she had led for eighteen years.

“Can you not think of any measure Merope could have taken to make Tom Riddle forget his Muggle companion, and fall in love with her instead?”

“The Imperius Curse?” Harry suggested. “Or a love potion?”

“Very good. Personally, I am inclined to think that she used a love potion. I am sure it would have seemed more romantic to her, and I do not think it would have been very difficult, some hot day, when Riddle was riding alone, to persuade him to take a drink of water. In any

「よろしい。わし自身は、『愛の妙薬』を使用したと考えたいところじゃ。そのほうがメローピーにとってはロマンチックに感じられたことじゃろうし、そして、暑い日にリドルが一人で乗馬をしているときに、水を一杯飲むように勧めるのは、さほど難しいことではなかったじゃろう。いずれにせよ、我々がいま目撃した場面から数ヶ月のうちに、リトル・ハングルトンの村はとんでもない醜聞で沸き返ったのじゃ。大地主の息子が碌でなしの娘のメローピーと駆け落ちしたとなれば、どんなゴシップになるかは想像がつくじやろう」

「しかし、村人の驚きは、マールヴォロの受けた衝撃に比べれば取るに足らんものじゃった。アズカバンから出所したマールヴォロは、娘が暖かい食事をテーブルに用意して、父親の帰りを忠実に待っているものと期待しておった。ところが、マールヴォロを待ち受けていたのは、分厚い埃と、娘が何をしたかを説明した別れの手紙じゃった。わしが探りえたことからすると、マールヴォロはそれから一度も、娘の名前はおろか、その存在さえも口にしなかった。娘の出奔の衝撃が、マールヴォロの命を縮めたのかもしれぬ……それとも、自分では食事を準備することさえできなかったのかもしれぬ。アズカバンがあの子を相当衰弱させていた。マールヴォロは、モーフィンが小屋に戻る姿を見ることはなかった」

「それで、メローピーは？ あの女は……死んだのですね？ ヴォルデモートは孤児院で育ったのではなかったですか？」

「そのとおりじゃ」ダンブルドアが言った。「ここからはずいぶんと推量を余儀なくされるが、何が起ったかを論理的に推理するのは難しいことではあるまい。よいか、駆け落ち結婚から数ヶ月後に、トム・リドルはリトル・ハングルトンの屋敷に、妻を伴わずに戻ってきた。リドルが『たぶらかされた』とか『騙された』とか話していると、近所で噂が飛び交った。リドルが言おうとしたのは、魔法をかけられていたがそれが解けたということだったのじゃろうと、わしはそう確信しておる。ただし、あえて言うならば、リドルは

case, within a few months of the scene we have just witnessed, the village of Little Hangleton enjoyed a tremendous scandal. You can imagine the gossip it caused when the squire's son ran off with the tramp's daughter, Merope.

“But the villagers' shock was nothing to Marvolo's. He returned from Azkaban, expecting to find his daughter dutifully awaiting his return with a hot meal ready on his table. Instead, he found a clear inch of dust and her note of farewell, explaining what she had done.

“From all that I have been able to discover, he never mentioned her name or existence from that time forth. The shock of her desertion may have contributed to his early death — or perhaps he had simply never learned to feed himself. Azkaban had greatly weakened Marvolo, and he did not live to see Morfin return to the cottage.”

“And Merope? She ... she died, didn't she? Wasn't Voldemort brought up in an orphanage?”

“Yes, indeed,” said Dumbledore. “We must do a certain amount of guessing here, although I do not think it is difficult to deduce what happened. You see, within a few months of their runaway marriage, Tom Riddle reappeared at the manor house in Little Hangleton without his wife. The rumor flew around the neighborhood that he was talking of being ‘hoodwinked’ and ‘taken in.’ What he meant, I am sure, is that he had been under an enchantment that had now lifted, though I daresay he did not dare use those precise words for fear of being thought insane. When they heard what he was saying, however, the villagers guessed that Merope had lied to Tom Riddle, pretending that she was going to have his baby, and that he had married her for this

頭がおかしいと思われるのを恐れ、とうていそういう言葉を使うことができなかったのであらう。しかし、リドルの言うことを聞いた村人たちは、メローピーがトム・リドルに妊娠していると嘘をついたためにリドルが結婚したのであらうと推量したのじゃ」

「でもあの人は本当に赤ちゃんを産みました」

「そうじゃ。しかしそれは、結婚してから一年後のことじゃ。トム・リドルは、まだ妊娠中のメローピーを捨てたのじゃ」

「何がおかしくなったのですか？」ハリーが聞いた。

「どうして『愛の妙薬』が効かなくなったのですか？」

「またしても推量にすぎんが」ダンブルドアが言った。

「しかし、わしはこうであつたろうと思うのじゃが、メローピーは夫を深く愛しておつたので、魔法で夫を隷従させ続けることに耐えられなかったのであらう。思うに、メローピーは薬を飲ませるのをやめるという選択をした。自分が夢中だったものじゃから、夫のほうもそのころまでには、自分の愛に応えてくれるようになっていると、おそらく、そう確信したのじゃろう。赤ん坊のために一緒にいてくれるだろうと、あるいはそう考えたのかもしれない。そうだとしたら、メローピーの考えは、そのどちらも誤りであつた。リドルは妻を捨て、二度と再び会うことはなかった。そして、自分の息子がどうなっているかを、一度たりとも調べようとはせなんだ」

外は墨を流したようにまっ暗な空だった。ダンブルドアの部屋のランプが、前よりいっそう明るくなったような気がした。

「ハリー、今夜はこのくらいでよいじゃろう」ややあつて、ダンブルドアが言った。

「はい、先生」ハリーが言った。ハリーは立ち上がったが、立ち去らなかった。

「先生……こんなふうにヴォルデモートの過去を知ること、大切なことですか？」

「非常に大切なことじゃと思う」ダンブルドアが言った。

「そして、それは……それは予言と何か関係があるのですか？」

reason.”

“But she *did* have his baby.”

“But not until a year after they were married. Tom Riddle left her while she was still pregnant.”

“What went wrong?” asked Harry. “Why did the love potion stop working?”

“Again, this is guesswork,” said Dumbledore, “but I believe that Merope, who was deeply in love with her husband, could not bear to continue enslaving him by magical means. I believe that she made the choice to stop giving him the potion. Perhaps, besotted as she was, she had convinced herself that he would by now have fallen in love with her in return. Perhaps she thought he would stay for the baby’s sake. If so, she was wrong on both counts. He left her, never saw her again, and never troubled to discover what became of his son.”

The sky outside was inky black and the lamps in Dumbledore’s office seemed to glow more brightly than before.

“I think that will do for tonight, Harry,” said Dumbledore after a moment or two.

“Yes, sir,” said Harry.

He got to his feet, but did not leave.

“Sir ... is it important to know all this about Voldemort’s past?”

“Very important, I think,” said Dumbledore.

“And it ... it’s got something to do with the prophecy?”

“It has everything to do with the prophecy.”

“Right,” said Harry, a little confused, but reassured all the same.

He turned to go, then another question occurred to him, and he turned back again.

「大いに関係しておく」

「そうですか」ハリーは少し混乱したが、安心したことに変わりなかった。

ハリーは帰りかけたが、もう一つ疑問が起こって、振り返った。

「先生、ロンとハーマイオニーに、先生からお聞きしたことを全部話してもいいでしょうか？」

ダンブルドアは一瞬、ハリーを観察するようにじっと見つめ、それから口を開いた。

「よろしい。ミスター・ウィーズリーとミス・グレンジャーは、信頼できる者たちであることを証明してきた。しかし、ハリー、きみに頼んでおこう。この二人には、ほかの者にいっさい口外せぬようにと、伝えておくれ。わしがヴォルデモート卿の秘密をどれほど知っておるか、または推量しておるかという噂が広まるのは、よくないことじゃ」

「はい、先生。ロンとハーマイオニーだけにとどめるよう、僕が気をつけます。おやすみなさい」

ハリーは、再び踵を返した。そしてドアのところまで来たとき、ハリーはある物を見た。壊れやすそうな銀の器具がたくさん載った細い脚のテーブルの一つに、醜い大きな金の指輪があった。

指輪に供まった黒い大きな石が割れている。

「先生」ハリーは目を見張った。

「あの指輪はー」

「何じゃね？」ダンブルドアが言った。

「スラグホーン先生を訪ねたあの夜、先生はこの指輪をはめていらっしゃいました」

「そのとおりじゃ」ダンブルドアが認めた。

「でも、あれは……先生、あれは、マールヴォロ・ゴントがオグデンに見せたのと、同じ指輪ではありませんか？」

「まったく同一じゃ」ダンブルドアが一礼した。

「でも、どうして……？ ずっと先生がお持ちだったのですか？」

「いや、ごく最近手に入れたのじゃ」ダンブルドアが言った。

「実は、きみの叔父上、叔母上のところにきみを迎えに行く数日前にのう」

「それじゃ、先生が手に怪我なさったところで

“Sir, am I allowed to tell Ron and Hermione everything you’ve told me?”

Dumbledore considered him for a moment, then said, “Yes, I think Mr. Weasley and Miss Granger have proved themselves trustworthy. But Harry, I am going to ask you to ask them not to repeat any of this to anybody else. It would not be a good idea if word got around how much I know, or suspect, about Lord Voldemort’s secrets.”

“No, sir, I’ll make sure it’s just Ron and Hermione. Good night.”

He turned away again, and was almost at the door when he saw it. Sitting on one of the little spindle-legged tables that supported so many frail-looking silver instruments, was an ugly gold ring set with a large, cracked, black stone.

“Sir,” said Harry, staring at it. “That ring —”

“Yes?” said Dumbledore.

“You were wearing it when we visited Professor Slughorn that night.”

“So I was,” Dumbledore agreed.

“But isn’t it ... sir, isn’t it the same ring Marvolo Gaunt showed Ogden?”

Dumbledore bowed his head. “The very same.”

“But how come — ? Have you always had it?”

“No, I acquired it very recently,” said Dumbledore. “A few days before I came to fetch you from your aunt and uncle’s, in fact.”

“That would be around the time you injured your hand, then, sir?”

“Around that time, yes, Harry.”

Harry hesitated. Dumbledore was smiling.

<p>すね？」</p> <p>「そのころじゃ。そうじゃよ、ハリー」</p> <p>ハリーは躊躇した。ダンブルドアは微笑んでいた。</p> <p>「先生、いったいどうやって――？」</p> <p>「ハリー、もう遅い時間じゃ！ 別の機会に話して聞かせよう。おやすみ」</p> <p>「……おやすみなさい。先生」</p>	<p>“Sir, how exactly — ?”</p> <p>“Too late, Harry! You shall hear the story another time. Good night.”</p> <p>“Good night, sir.”</p>
---	--